

山下菊二

《あけぼの村物語》



山下菊二 (1919-1986)
《あけぼの村物語》

1953年
油彩・ドンゴロス
137.0×214.0cm
平成25年度購入

こ

の絵の前に立つと、怖ろしい事件に出くわしてしまつたことに気づきます。慌てて引き返そうとしても手遅れです。すでにあなたはこの事件の目撃者になつてゐるのですから。

山下菊二《あけぼの村物語》は、山梨県の奥深い旧曙村で起こつた現実の事件に取材して描かれた作品です。それゆえ、戦後の不安定な日本の現実を新たなリアリズムの手法で捉えようとする「ルポルタージュ絵画」の記念碑的作品と位置づけられてきました。しかし、事件の一部始終を説明したからといって、この絵画が「わかる」わけではありません。そもそも社会的な事件をニュースのように報道することが、制作の目的ではないからです。ここではあえてこうした外的な情報を封印し、画面から読み取れる要素だけに限定して、この絵画の独自性を考えてみたいと思います。

作品に向き合う私たちは、絵画上の出来事に秩序を与えようと努めるでしょう。しばらく目を凝らしていると、様々なモチーフをまとめ上げる軸が浮かびあがってきます。画面右手の農家の梁、中央の緑の麦畑、そして左手のリアカーそれぞれの形態が画面の奥行きを暗示しており、三点消失遠近法に基づく構図であることが分かります。分割された三つの画面の中心をなすモチーフは、首を吊る老婆、左手

に麦の穂を右手に鎌を持って頭を垂れた女、そして血の池に浮かぶ男の死体です。その内二人は明らかに死者なので当たり前ともいえませんが、三者とも絵画の外部に視線を投げかけることはありません。リアカーで死体を運んできたと思われる加害者の男も、胸のあたりで断ち落され、その表情をうかがうことはできません。視線を投げ返してくる「眼」はもっぱら、魚、鳥、犬といった生き物たちのものなのです。事件の真相を知っているのは彼らだけであるという意味でしょうか。擬人化された犬は、これらの出来事を「見る」ことを、私たちに求めているのです。

後景に意識を向けると、三つの場面の奥に山間を縫う「道」が描かれていることに気づきます。道はこの村が周囲から隔絶した環境にあることを示し、その閉鎖性が災いを招いたとも解釈できそうです。と同時に、災いが共同体の外部から到来したという意味にも取れるでしょう。幾本かの道の先に、襷のように折り重なつた山並みを通して、夕日に染まつた空がのぞいています。まもなく夜の帳が下りて、闇がすべてを包み込んでしまふ。昼と夜、すなわち人間が支配する時間と生き物や魍魎（むぎもろ）たちが生きる時間の境界線上に、忘却の淵にたつ凄惨な事件の根深い構造が一瞬間を出したとは言えないでしょうか。

(美術課主任研究員 鈴木勝雄)